

文献紹介

地域研究専門図書館員の役割

中 村 弘^{*} 光

ここで地域研究 (area studies) というのは、世界のある特定地域・国について、総合的・学際的 (integrated, inter-disciplinary) なアプローチをとる研究を意味している。また、地域研究専門図書館員 area studies librarian,あるいは area specialist bibliographer とは、大学・研究図書館で地域研究資料・文献の収集、選択、レファレンス、書誌作成などにあたる人々のことである。

日本では、中国研究、インド研究、またアメリカ研究といった具体的な研究についての表現は勿論確立しているが、それらを「地域研究」として考えることは、いまだ定着していない。また、地域研究図書館 (area studies library) とか、地域研究専門図書館員という言葉が奇異なものに感じられるのが現在の実状であろう。

地域研究が、アメリカでようやくその形を整えはじめたのは、1930年代後半の頃、アメリカ自身の社会・文化への自己批判がようやく始められた時期に、アジア(中国・日本)研究、ラテン・アメリカ研究が組織化されはじめた時期である。地域研究は異質文化・社会の理解という思想的背景をもちつつ、また現実の経済・政治的問題への解明をもとめ

るきわめて「実践的」な意図をもった研究方法であり、第2次世界大戦中に急速に発展した。戦後、地域研究方法論がアメリカの社会科学研究所協議会 (Social Sciences Research Council)を中心に整理された。しかし、1946年当時、アメリカの諸大学で、地域研究プログラムはわずかに13(東アジア4、ラテンアメリカ6、ロシア・東欧3)しかない状態であった。

地域研究活動、また地域研究図書館が活発化するのには、1950年代末期、国防教育法 (National Defense Education Act) によって連邦政府から非西欧語教育・研究センターに多額の補助金が交付されるようになってからである。

地域研究と図書館との関係について、現在までに発表されたものでもっとも重要なものは1964年にシカゴ大学で開催された会議「地域研究と図書館」¹⁾である。各地域研究専門家と専門図書館員によって、両方の側から現状ならびに問題点が報告されている。

その中では比較的問題にされていなかった地域研究専門図書館について、最近次の二つの調査報告を入手しえた。

* なかむら ひろみつ アジア経済研究所。

注1) Tsien, Tsuen-Hsuei and H. W. Wines, eds: Area studies and the library; the Thirteenth Annual Conference of the Graduate Library School, May 20-22, 1965. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1966. 184 p.

1) Steueart, Robert D.

The area specialist bibliographer :
an inquiry into his role. Metuchen,
N. J. The Scarecrow Press 1972.
152 p.

2) Smith, Eldred R.

‘The specialist librarian in the
academic research library: the role
of the area studies librarian.’

Submitted for the Seventeenth
Seminar on the Acquisition of Latin
American Library Materials. Uni-
versity of Massachusetts, Amherst,
Massachusetts June 11-14, 1972.

この2報告とともに、質問書・インタビューとを併用して、地域研究専門図書館員の役割について、実際の関係者（図書館員、学部スタッフ、図書館管理者）から調査したものである。

はじめにスチュアートの報告を紹介しておく。

序文 Jay E. Daily

- I. 諸大学における地域研究プログラム
- II. 図書館の役割についての調査
- III. 地域専門書誌担当者 (Area specialist bibliographer) の発展と期待にたいするそれらの影響
- IV. 役割の自覚と期待
- V. 結論と勧告
- VI. 関係文献目録

附録。地域研究を実施している ARL
(研究図書館協会) メンバー

すなわち、第1章では、アメリカの大学、高等教育・研究機関における地域研究がどのように発展してきたのか、どのような特質をもっているのかが概括される。さきにも少し言及したように、東アジア研究、ラテンア

リカ研究が比較的早い時期にはじめられ、アフリカ研究、中東研究の出発はおくれている。また、ソ連のスプートニクの成功 (1958 年)、アメリカ国内のアフロ・アメリカ人 (黒人問題) の激化等、研究領域外の諸条件によって大きく動かされていることがこの章からも明白であろう。ちなみに地域専門書誌担当者が活動している地域研究プログラム 109 (1970) の百分比は、次のようになっている。

東アジアプログラム——23%、中東プログラム——12%、南・東南アジアプログラム——12%、アフリカプログラム——9%、ラテンアメリカプログラム——20%、ロシア・東欧プログラム——24%。

第2章は図書館員の役割について、過去にどのような調査方法で行われたかを概観している。これは、役割・期待調査の全般論にも関わる調査方法論である。

第3章は、126名の地域専門書誌担当者のうち30名について、ならびに専門図書館員名簿にもとづいて選ばれた37名の地域専門書誌担当者について、性別、教育、専門主題、使用言語、出版物の専門分野、「地域」の訪問回数、出生地、職業別学協会、あるいは学術協会への参加、地位と給与についての調査が整理されている。ここで詳細に紹介することは不可能であるが、性別構成でいえば、他の一般大学図書館に比較すると女子の比率が低い、教育の水準は非常に高く博士号をもつものもある。専攻科目は図書館等の他は、歴史、言語、文学が多い。話し言語数も多く、ロシア・東欧地域専門書誌担当者の約3分の2はすべてのスラブ系言語を話しうる。中東地域専門書誌担当者の4分の3はアラビア語とトルコ語を話す。また、出生地からみると、アメリカ国内出生者の比率がきわめて低く5分の1にすぎない。

第4章「役割の自覚と期待」がこの報告の中心部といえよう。この章で、地域研究学部スタッフ、図書館管理者が、地域専門書誌担当者に何を期待しているか、また、書誌担当者自身がどのように自からの役割をうけとっているか、これを相互にぶつけ合わせて一致点と不一致点を明らかにする。

まず、3グループの回答を比較して一致した項目からとりあげる。

1. 地域専門書誌担当者（以下の項目では省略）は、体系的に包括的な書誌ならびに書店目録をフォローする。(99%)
2. 学部スタッフからのあらゆるリクエストを確保するよう努力する。(99%)
3. 書誌類、出版社カタログ、雑誌掲載書評の熟読によって、関連部門における新規資料を発見する。(97%)
4. 「地域」関連諸国の書籍取引ならびに書誌について熟知する。(96%)
5. 資料収集旅行の際には、学部の諸種のインタレストを考慮するのにつとめる。(91%)
6. 学部スタッフとともに、コレクションを発展させるべき新しい地域を確認する。(88%)
7. 必要資料ファイルを作成し、あらゆる言語の絶版資料を探究する。(88%)
8. 学部スタッフおよび大学院学生に、彼等に関心ある新しい出版物につき知らせる。(85%)

以上資料収集についての役割について、かなり一致点が高いのであるが、これは、学部スタッフが収集の責任等についてはまったく異なった見解を示している。

すなわち、不一致率のもっとも高いのは次の5項目である。

1. 図書選択の責任 (50%)
2. カリキュラムに関連したコレクション

の評価 (37%)

3. 地域別コレクションからの資料の除去 (weeding) (35%)
4. 図書選択実務の調整 (29%)
5. 学部会議への参加 (28%)

すなわち、学部側は資料選択の最終決定権を保持したいと望んでいるし、また地域専門書誌担当者が学部の行事に入ってくるのを望んでいない。

地域専門書誌担当者グループの方は、全国地域研究学会への参加、「地域」資料の利用法についての授業、当該地域への資料収集旅行参加について積極的な姿勢をみせている。

やや、はしょった紹介であるので、報告書の意図、結果を十分に伝ええたとはいえないであろうが、「役割・期待」を通じたこの調査が、アメリカの地域研究図書館、図書館員の現状（私自身が直接的に接触して経験をもつ東アジア関係図書館を事例として頭に浮かぶのであるが）を相当うまく反映しているように考えられる。

次に、Eldred Smith の報告をごく簡単に紹介しておこう。この Smith 報告に、コーネル大学の法律図書館の Susan E. Russell が Council on Library Resources: に 'A Specialist Librarian in the Academic Research Library' としてまとめたものにもとづいて要約したものである。この調査は、前のスチュアートのものが、個人別に行った調査もあるのに対し、これは機関（ここでは76の大学図書館、うち72館が回答を寄せた）にに対し質問書をだしてさらに個人別インタビューを加えて調査している。

調査者の関心は次の10点に中心がおかれている。

1. 図書館内におけるスペシャリスト・ライブラリアンの役割。

2. スペシャリスト・ライブラリアンは図書館ならびにそのスタッフに対しどのような関係をもつか。

3. 彼等はいかに組織され、管理されているか。

4. 図書館が彼等に提供している行動範囲、報酬、便益の程度。

5. 彼等が利用者に提供しているサービスの種類。

6. 彼等の利用者に対する態度、ならびに相互の関係。

7. 彼等の教育的背景、教育の重要性についての彼等の見解。

8. 彼等の職業的掛わり合い、ならびにそれへの忠誠。

9. 彼等の学術的掛わり合い。

10. スペシャリスト、他の図書館員、図書館管理者、ならびに利用者間の緊張領域

ここで、スペシャリストといわれているのは、前のスチュアートの表現、地域専門書誌担当者を含むし、それが大きな地位を占めているが、その他に特定主題専門の書誌担当者をも含め、やや広い概念として用いられている。

「最近10年、あるいは15年の間に、大学図書館界に重要な変化が起りはじめています。すなわち、専門的スペシャリスト(professional specialist)をひきつけようとする関心が増大

している」(序文)、つまり非常に明確な教育的背景をもった図書館員、例えば物理学図書館員、ラテンアメリカ図書館員が要求されるようになった。これは、図書収集の責任が各学部から図書館の方に移行しつつあるという事情にも関連している。

ここでも、資料収集、書誌サービス、レファレンスサービス等がスペシャリストによっての当然の仕事と考えられている。しかしながら、問題は、その図書館内の組織的位置である。事実、スペシャリストはラインではなくスタッフとしての方が活躍しやすいし、各部門にわたる trouble shooter 的割、調整役を果している。しかし、その反面、非組織的な活動があることもまた否定しえない。

スペシャリストの雇用はコストが高いことも、指摘されている。しかし、図書館の専門化・高度化にあたって、スペシャリスト・ライブラリアンはそのような力を果たしているのではないだろうか。

(アジア経済研究所図書資料部次長)

以上二つの報告は、アカデミックな図書館、研究図書館が展開してゆく一つの方向、スペシャリスト・ライブラリアンを活用した高度化、専門化の方向を示すものといえようし、われわれ日本の現状も同ような問題を遠くない将来に提起するのではなかろうか。